

① 《特集》 三つの技法の活用で 人をつなぎ社会を変える！

⑪ 《うおろ君の気にな～るゼミナール》
「エコシステム」って？

⑪ 「市民活動川柳」欄はじめます（募集要項）

⑫ 《この人に》
毛受 敏浩さん（関西国際大学客員教授）

⑭ 《V時評》
壊れゆく民主主義を 基本にかえて問い直す

⑮ 《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》
「お金持ちとは違うけど」
余裕があることを自覚した夏の日
信田 禮子（浅香山病院「グループあさか」ボランティア）

⑯ 《能登地震・豪雨災害 珠洲発～現地から伝える「被災地の今」》
被災地が被災地でなくなるとき
村上 ゆり（NPO法人外浦の未来をつくる会 理事）

⑰ 《現場は語る～コーディネートの現場から》
高校生の活動体験を「意味あるもの」に
——地域と関わる「探究」の実践から
青山 織衣（社会福祉法人大阪ボランティア協会 ボランティアコーディネーター）

⑳ 《毎日NPO！ 山田発信 組織と事業の支援論》
NPOの理事として団体に貢献する！
山田 泰久
（公益財団法人日本非営利組織評価センター（JCNE）業務執行理事）

㉑ 《情報ピックアップ》

㉒ 《シネマ／ライブラリー》
『百姓、わらう。』／書籍紹介

㉓ 《晴れ時々ボランティア》
田中 昭子 さん（ほっとここ 代表）

ヴォロを読む会

次回開催は2026年9月18日（金）12:10～12:55の予定です！



じぶんの町を良くするしくみ

赤い羽根共同募金

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。

例えば……



地域で、子育てのお手伝いをしたり、
悩んでいるお母さん、お父さんの
相談にのる活動や、



障がいのある人が、まちで幸せに暮らせ
るお手伝いをする活動や、



地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者
に、栄養の整った食事を届ける活動や、



地域に住むみんなが「安心・安全」に
暮らすための活動や、

地域のいろいろな活動のために役立てられます。

- 中央共同募金会の全国共通助成テーマである「つながりをたやさない社会づくり～あなたは一人じゃない～」を助成テーマとし先進的なとりくみを支援してまいります。また、地域福祉活動への『重点助成分野』を「誰をも受け入れ誰もが参加できる地域づくり」「健康でいきいきと暮らし続けられる地域づくり」「生きづらさを抱える子ども・若者とその家族への支援」「災害ボランティア活動・防災・減災活動への支援」「生活に困難を抱える人々たちへの緊急支援」とし、これらの活動を重点的に支援してまいります。
- 国内で大きな災害が発生した時は、共同募金は都道府県域を超えて、被災地で被災した人々たちを助ける活動の支援も行います。
- 寄付金には、税の特典があります。会社など法人の寄付金は、全額損金算入できます。個人の寄付金は、所得税の所得控除または税額控除、住民税の税額控除の対象になります。



赤い羽根おおさか

www.akaihane-osaka.or.jp/

募金の使いみちはすべて、ホームページに掲載されています。

三つの技法の活用で 人をつなぎ 社会を変える!

さまざまな人や組織とのつながりを生み出すことの大切さは
市民活動に関わる多くの方々にとって、自明のことだろう。

権力を持たず、財力も乏しい私たちは、さまざまな人や組織とつながること、
つまり市民の参加と協力で社会課題の解決に挑戦することになる。

今号は、その人や組織を「つなぐ技法」として、
ボランティアコーディネーション、コミュニティオーガナイズ、
協力のテクノロジーの三つに焦点を当てる。

それぞれの技法を極め、私たちの「つなぐ力」を高めていこう。

特集チーム 竹内 友章、早瀬 昇、増田 宏幸

幅広い活動を支えるフリーエイティブな働き

人をつなぐ技法として、市民活動に関わる人々に、もっともなじみがあるのは「ボランティアコーディネーション」であろう。全国ボランティアコーディネーター研究集会が1994年に開始され、2001年にはその企画・運営に継続的に関わっていた有志により、日本ボランティアコーディネーター協会（JVCA）が設立された。

そのJVCAは09年、活動分野を超えた普遍的な形で体系化された「ボランティアコーディネーション力」の検定システムを開始。専門職であるボランティアコーディネーターだけでなく、広く市民の参加を進めるさまざまな立場の人々や団体が活用できる技術として注目されるようになった。実際、ボランティアセンターや福祉施設、病院、社会教育施設のスタッフ、コミュニティワーカーや生活支援コーディネーターなどとはもとより、市民団体、国際交流協会、生活協同組合、自治会のリーダー、自治体職員など、幅広い人々の活動を支えるものとなっている（図1）。

当事者であることの 気づきと協働を応援

「ボランティアコーディネーション」（以下、VCo）とは、「それぞれの人の社会参加を支え、それぞれが当事者であることの気づきと協働を応援する技法」だ。この技術は、以下のような形で展開される。

① 人々の「参加」の 意欲を高める

地域での活動はもちろん、福祉施設や学校、博物館、さらにさまざまな市民活動団体において、「もっと多くの人／多様な人に参加してもらうにはどうしたらいいのか？」という切実な声をよく耳にする。

一方で、同じくらいよく聞くのは「地域に関わりたい」「何か役に立ちたい」「つながりたい」というつぶやきである（あるいは「つぶやき」以前の思いかもしれない）。

この両者の声を受け止め（あるいは

内なる思いを顕在化することを助け）、それぞれの段階に応じた一歩を踏み出せるようにしようとする点で、VCoは市民社会を構築する上で不可欠の土台となるものと言えるだろう。

では、どのように参加の意欲を高めるのか。「こうすれば、こうなる」といった一律の手順があるわけではないが、いわゆるアメとムチと言われる外発的動機づけではなく、内発的動機づけが高まるように環境を整える多様なアプローチが考えられる。これらを発案していくのもVCo力である（詳細はJVCAの書籍を参照していただきたい）。

② 対等な関係を作り出す

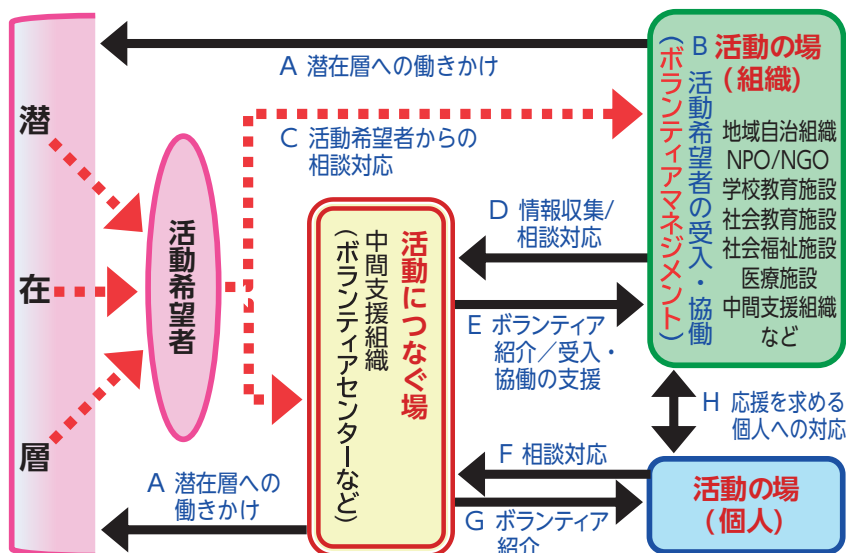
次に、VCoの大きな特徴は、「異なる」立場、状況の人（や団体）の出会いに関わる点である。ここで「コーディネーション coordination」という単語の意味を確認しておこう。一般的には「調整して全体の調和を生み出す」という意味合いで使われることが多い。しかし、もう一つ重要な意味がある。

それは「おのおのの要素を対等（同格）にする」というものである。

例えば、買い物支援といった具体的なサービスを伴う活動の場合、その場面においては「支援する側」と「支援される側」という非対称の立場となる。しかしこの関係性を固定化するのではなく、循環させ、同じ地域住民として何を目指すのかという「共同の企て」（大森彌）に変換していくのがVCo力である。すなわち、「今、ニーズとウォンツを持つ人」だけでなく、同じ社会に生きる市民としてボランティアもまた当事者なのだという気づきを喚起する働きかけをするのがVCoだ。

また、福祉施設や社会教育施設のようには有給職員が存在する場合、ボランティアと職員との立場は全く異なる。しかし、施設のそもそもの目的達成や利用者のQOL向上を目指すという点では、対等であり仲間であるという意識を双方が認識することが重要になる。そのきっかけや対話を行うのがVCoということになる。

図1 ボランティアコーディネーションの全体像



出典『ボランティアコーディネーション力2級検定テキスト』p33を一部修正

さらに、環境、福祉、多文化共生といった、分野が異なる人や組織が一緒に活動する場合、あらゆる場面で「対等にする」という意識やそれを具現化する仕組みを考えることが必要になる。「課題は分野を超えて地続きである」という認識をお互いに持てるようにするのもVCOと言えるだろう。

さて、では「対等な関係を作り出す」にはどうすればいいのか。そのためには、多くの場合、それぞれが少しずつ「変化

③ つながること 新たな解決力を生み出す

さて、しんどい思いをしてまで、な

する」ことが必要となる。AとBのままではつながりにくい、AとBになれば、それが可能になる場合が多い。

この際に「共感」によるエネルギーが作用することが多い。課題を傍観する第三者として振る舞っていたのが、応援を求める人の夢や願いに共感し、課題が我がこととなっていく。同じ夢や願いを実現しようという点で、対等な協働関係になっていくわけである(図2)。

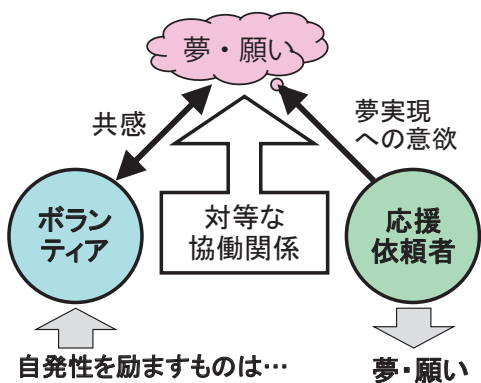
VCOには、AがAに、BがBになるような変化を起こす力が含まれている。それは面談や会議の場だけではなく、ちょっとした雑談の中にも潜んでいる。その時々に適した情報やデータを伝えたり、双方のニーズを代弁したりすることによって、ボランティアや関係者の気づきが生まれ活動内容が深化するのはよく見られることである。

ぜ異なる立場の人や組織がつながる必要があるのだろうか。それは言うまでもないが、総合力や新たな解決策を生み出すためである。今、地域共生社会の実現のために、多機関連携、多職種協働の推進がさかんに言われており、多様な機関のスタッフが会議で出席する機会は増えた。しかし、そこからの展開はなかなか難しい。ボランティア・市民活動の場合も同様に、常に、異なるものがつながること何が生まれるのか、何を生み出したいのかというビジョンを持つことが大切である。

④ 気づいた問題を社会化する

③で述べたことは、一般に「コーディネーター」と言われる人に共通する課題だが、ここで、さらにVCO特有の役割にも触れておきたい。ボランティア・市民活動は、言うまでもなく制度的に確立

図2 夢・願いの共有で対等な協働関係に



した内容を行うものではなく、むしろ、制度が未整備の課題や多くの人が気づいていない少数者のニーズに関わることが多い。そのため、活動する中で、さらに多くの矛盾や制度の不備、人々の誤解や偏見に気づくことがある。それを一人の感想に終わらせず、共に伝え広げることが励ますことも大切な役割である。



以上の4点をまとめて、JVCAでは「ボランティアコーディネーション」を以下のように定義している。

「一人ひとりが社会を構成する重要な一員であることを自覚し、主体的・自発的に社会のさまざまな課題やテーマに取り組む」というボランティア活動の意義を認め、その活動のプロセスで多様な人や組織が相互に対等な関係でつながり、新たな力を生み出せるように調整することで、一人ひとりが市民社会づくりに参加することを可能にする働きである。

こうしたことを踏まえて、魅力的なボランティア活動プログラムを立案することもVCOの重要な要素である。すなわち、VCOはただ既存のものを組み合わせるといったものではなく、あらゆる場面で実際にクリエイティブな働きなのである。

まとめ 日本ボランティア
コーディネーター協会

うお3君の 気にな〜る ゼミナール

Vol.
149

「エコシステム」って？



「エコシステム」とは、生物学で「生態系」を意味する。植物や動物、微生物といった生物だけでなく、土壌や水、大気などの非生物的環境が相互に影響し合い、生態系として機能する仕組みを指す。

この考え方を経営学に取り入れたのが、米経営学者のジェームズ・F・ムーア氏だ。1993年にハーバード・ビジネス・レビューで「ビジネスエコシステム」の概念を提唱。企業は顧客やサプライヤー、競合企業など多様な主体と相互に影響を及ぼし合いながら、生態系のように「共進化」していく存在だとした。

近年、企業には、気候変動や生物多様性、人権などの社会課題への対応が求められている。こうした課題は一企業だけで解決することが難しく、取引先や行政、NPO／NGOなど多様なステークホルダーがそれぞれの強みを生かしながら連携するエコシステムの考え方が、サステナビリティ経営でも重要になっている。

例えば、サーキュラーエコノミー（循環経済）もエコシステムの考え方に基づく。製品メーカーや小売り、リサイクル事業者、自治体、消費者までが連携することで、資源循環が実現できる。

OECD（経済協力開発機構）も、持続可能な成長には、多様な主体が連携するエコシステムが不可欠だとしている。

オルタナティブ編集長 吉田 広子

10・11月号から「市民活動川柳」欄はじめます

このたび「市民活動川柳」欄を設けることになりましたので、作品を募集します。募集要項は以下の通りです。

【内 容】

- ①市民活動そのものについて詠んだ川柳
(例) 今日もまた 子ども食堂に 笑顔満つ
- ②一般的な社会問題（事象）などについて市民活動目線で詠んだ川柳
(例) 増え続ける 子ども食堂 よろこべぬ

【お名前】

柳名でも本名でもけっこうです。掲載誌面の大きさに制約があるため、柳名は「6文字以内」とさせていただきます。誌面に載せる場合、本名のみの場合は本名を、柳名を書かれた方は柳名を掲載します。

【投稿作品数】

1回につき5句まで

【投句先】

作品投稿フォームで受け付けます。

URL <https://forms.gle/DTZMfnbcW2XV9Mej8> か

QRコードでお入りください。

【選 者】

野咲 花子さん（川柳憲九会）

【「秀逸」作品の発表】

ウォロ各号で掲載します。

■問い合わせ先■

大阪ボランティア協会

市民活動総合情報誌ウォロ編集部 [担当・増田]

電話：06(6809)4901 Eメール：office@osakavol.org

※メールでの投句は受け付けていません。



～市民視点の映画を紹介する

毎日食べるごはんの向こう側を、想像することは多くないかもしれない。現在、49歳以下の若い農家は日本の人口のわずか0・1%という。そんな絶滅危惧種ともいえる彼らに、監督の柴田昌平はカメラを向けずにはいらなかった。気候変動の厳しい自然環境、理不尽な農政という現実には置かれながらも、50年先、100年先の未来へ根を張ろうとする彼らのひたむきな姿に衝撃を受け、心動かされたのだ。

広島県で野菜の有機栽培を営む森昭暢さんは、見えない微生物の力を極限まで引き出している。彼は「土が植物を育てるだけじゃなくて、植物もまた土を育てている」という。初めて聞いた言葉だった。雑草も土の中の微生物も、彼にと

っては「農園のスタッフ」なのだ。人間が自然をコントロールするのではなく土の中では助け合う仕組みがあり、それを最大限に利用する姿は、命を育む創造力に満ちていた。

「酪農」と言えば、牛は青々とした牧場で草を食みながらお乳を出しているとイメージしていた。だが実際には大規模畜舎で飼われる干し草や輸入穀物などを食べている。北海道の酪農家の実感では、牛を牧場に放し自由に草を食べさせる放牧酪農は、全体の1割程度だという。

北海道で酪農を営む平石拓也さんは、親の代から続く1億円以上の借金を背負う大規模な経営から、牛のペースに合わせる放牧へとかじを切った。借金を返すために1



©プロダクション・エイシア

監督・撮影：柴田 昌平
プロデューサー・撮影：大兼久 由美
メインビジュアル：三田 圭介
テーマ曲：Maico
制作・配給：プロダクション・エイシア
2026年 | 138分 | 日本 | DCP | ドキュメンタリー
9月26日のポレポレ東中野から全国順次公開

●今月の館主 おおがねく よしみ 大兼久 由美

沖縄県生まれ。柴田昌平監督作品のプロデュース、配給を行う。長編記録映画『ひめゆり』（2007）は公開以来毎年上映が続いている。全国で自主上映が続いている前作『百姓の百の声』は9月末よりDVD発売予定。

お問合せ：042-497-6975



イラスト：杉浦 健

私の市民活動 Library (第75回)



いっちゃんをよくこける

牧口 一二監修、
三島 亜紀子文、
みしま えつこ絵
かもがわ出版、2026年1月
2,200円（税込み）

主人公「いっちゃん」は、松葉づえを使って歩き、よくこける小学生。だが、傷の手当てなど寄り添って行動してくれる友達が大勢いる。走れない「いっちゃん」が野球に参加できるよう、ルールだって変えてくれる。「いっちゃん」自身、学校の運動会では校長先生のモノマネをしながら場内アナウンスをするなど、参加者を楽しませることに一役買う。

「いっちゃん」には「よくこける」という「弱み」がある。でも、周りの人たちの支えによってその弱みは補完できるし、モノマネでみんなを楽しませる「強み」を生かすこともできる。だから周りの

子どもたちと同じことができようになるなくても、互いに認め合い、助け合いながら小学校生活を送る。本書は、多様な人と出会い、自分とは異なる相手に想像力を向け、共感することの大切さを教えてくれる絵本である。

主人公「いっちゃん」のモデルでもある監修者の牧口一二さん（2024年9月26日、87歳で死去）には、下半身まひの障害があった。日本の駅にエレベーターがなかった1970年代、友人たちと「誰でも乗れる地下鉄をつくる会」を結成。大阪市交通局と対話を繰り返し、80年に日本で初めて地下鉄谷町線「喜連瓜破」駅へのエレベ

ーター設置を実現した。また、被災障害者の支援を目的とするNPO法人ゆめ風基金の代表を務めるなど、長年障害者運動に携わってきた。

監修者はその人生でも何度も「つまずく」ことがあった。日本が戦争のさなかにあった就学前、「空襲のとき、危ないから」との理由で小学校入学を断られたり、美術学校を卒業後54社もの就職試験を受けたのに、障害のせいかすべて不採用になったりした。だがそのたびに「つまずき」を力に変え、立ち上がり、日本のバリアフリーをけん引してきた。本書には、その原点が描かれている。

編集委員 阿部 太極